

被爆樹木アオギリ二世植樹式 松井一實広島市長あいさつ(要旨)

平成 29 年 6 月 5 日 (月曜日)

場所：国立市役所西側広場

本日は、平和首長会議の会長である広島市長として出席させていただきました。被爆樹木アオギリ二世植樹式にあたり、ひと言ごあいさつをさせていただきます。

佐藤一夫前国立市長には、昨年 11 月の国内での平和首長会議の総会で初めてお会いしたのが、最初で最後の出会いでありました。車いすで会場に見えられて、自分の体を支えるのも苦労するという状態のなか、演台に立たれて、平和について、人権について、熱くかつ力強くメッセージを出されました。自らの経験を踏まえた、とても力強いお話で、これは本物だなと感じました。その後訃報を聞き、現在は永見市長がその行政を継いでおられると聞き、私の想いも合わせて届けさせていただけたいと考えて、本日はこの場にまいりました。

1945 年 8 月 6 日、広島に原爆が投下されました。一発の原爆で、いわば広島はキノコ雲の下、地獄絵とって差し支えない状況になりました。生き長らえた方々は屍の間を縫い、皮膚が垂れたまま、水を求めてさまよい続けました。被爆直後は何が起きたかわからず、放射能のことも後から知るとい状況のなかで、その年の暮れまでに約 14 万人の人々が亡くなりました。その後、さまざまなことが解明されると同時に、生き残った方々は「なぜ、自分たちは殺されたのだろう」「死ななければならなかっただろう」と恨み辛みしました。直近の加害者を恨まないわけはありません。また、多くの救われなかった方々に対する負い目のようなものを感じます。さらには、多くの方々の誤解を受け、差別扱いされることもあったでしょう。

「このようなことは二度と起こさない」という広島市の願いと被爆者の願いは今、一致しています。「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」。直後に人を恨む、憎むということがあったとしても、それを繰り返すことは居たたまれません。このような私たちの想いをさまざまな活動を通じて皆さまに知っていただくための 1 つに、このアオギリ二世があります。被爆当時、この木は爆心地から 1.3 キロメートル離れた旧広島通信局（ていしんきょく：当時の郵便や通信を管轄する官庁）の中庭で焼けたのですが、辛うじて生きて、翌年に青い芽を吹きました。被爆直後は 70 数年間草木も生えない土地になったといわれたなかで、がんばればこのようなことが起きるのだと、生き残った被爆者が生死の葛藤をするなかで、生きるための希望の象徴になったという樹木であります。

被爆者の平均年齢は 80 歳を超えました。被爆体験を語ることによって、この想いをじかに伝えられる方は少なくなっています。我々の世代、孫の世代、次の世代に、この想いを伝えることがますます重要になっております。被爆樹木や被爆した建物など、いろいろなものを見て、知っていただくなか、広島「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という願いを広げていただければと思います。

平和首長会議加盟都市は世界で 7,300 を超えます。都市の住民の頭数を数えると、10 億人になります。地球上の 70 億人のうち、7 分の 1 の方々は、その想いに触れることができる可能性があります。また、国内では 96% の自治体が加盟都市になっていただいています。日本国民すべての方にこのように話ができればよいのですが、なかなか 1 人ひとりを訪ねることはできません。こうした意味で、街単位、人単位で、想いを伝える都市が多くあっていただけることを願うなかでの、本日の植樹であります。このアオギリ二世を、母なる木と同様に多くの方に希望を感じていただき、国立市の平和のシンボルとなるよう、皆さまの手で育てていただきたいと心から願っております。

終わりに、国立市のますますのご発展と市民の皆さまのご健勝ご多幸を心から祈念いたしまして、私のあいさつとさせていただきます。